

# 第三の居場所の必要性和 家庭・学級での居場所感との関連について

○畑綾佳・押江隆  
(山口大学教育学部心理学選修)

## 本研究の目的

自分の居場所と言われたら、どんな場所が思い浮かぶだろうか。自分の部屋、職場などさまざまなあるだろう。Oldenburg(1989)は大人の居場所について研究し、第一の居場所は家、第二の居場所は職場であると述べたうえで、都市空間の中でインフォーマルな人づきあいができる

「THE GREAT GOOD PLACE（とびきり居心地よい場所）」を「サードプレイス（第三の居場所）」と呼んでいる。では、働いていない子どもたちにとって第三の居場所となる場所はどのような場所なのであろうか。そもそも、第三の居場所とは必要なのであろうか。本研究では子どもたちの家庭を第一の場、学級を第二の場と位置づけたうえで、居場所を「自分が自分と認められる場所」と定義し、第三の居場所の在り方について検討することを目的とする。

本研究では大学生を対象に、現在の状況と大学入学以前の状況についてそれぞれ調査し、家庭・学級での居場所感と第三の居場所の欲しさとの関連について検討する。また、本人の性格特性と居場所についての意識との関連についても検討する。

## 方法

調査協力者 X大学の学生100名（男性39名、女性55名、無回答3名、その他3名）にアンケート調査を実施した。

手続き 202Y年7月上旬から下旬まで、Google Formを用いて、アンケート調査を実施した。質問項目は、①Big Five尺度短縮版(並川他, 2012)、②現在の家庭・学級での居場所感と第三の居場所の欲しさ、その第三の居場所の分類(中島・廣出・小長井, 2007)から社会的居場所、人間的居場所、匿名的居場所どれが好ましいか、③大学入学以前の家庭・学級での居場所感と第三の居場所の欲しさ、その第三の居場所の分類の3点である。

## 結果

(1)第三の居場所が欲しい者とそうでない者の間でBig Five尺度短縮版の各下位尺度得点に差がみられるかどうかについてt検定を行ったところ、第三の居場所が欲しい者はそうでない者に比べて情緒不安定性が高かった ( $t(49.2) = 3.23, p = .002, d = 6.41$ )。

(2)家および学級での居場所感の有無と第三の居場所の欲しさをクロス集計した後、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、大学入学以前における家庭での居場所感の有していない者は有している者に比べて第三の居場所が欲しいと回答していた ( $\chi^2(1) = 4.10, p = .04, \phi = .203$ )。

(3)第三の居場所の種類によってBig Five尺度短縮版の各下位尺度得点に差があるかどうかを分散分析で検討したところ、有意な差はみられなかった。

## 考察

家庭・学級での居場所感と第三の居場所の欲しさとの関連は大学入学以前における家庭での居場所感以外は見られなかった。同様に、性格特性との関連も情緒不安定性以外は見られなかった。情緒不安定性で有意な差が見られたのは、情緒不安定性が高い人は今ある自分の居場所について不安を持っていると考えられる。また、ほとんどで有意差が見られなかったことから、性格や本人の周りの環境は第三の居場所の欲しさの要因ではないことが示された。

本研究の結果から、今後の研究では本人の周りの環境や性格特性よりも、本人の思考に着目した方が良いと考えられる。第三の居場所が欲しい人は、どうしてそう考えるのかに注目する必要があるだろう。また、大学入学以前における家庭での居場所感の有していない者は有している者に比べて第三の居場所が欲しいと回答していたことが示されたことから、同じ青年期でも大学生よりも自由の少ない中高生に調査を行うことで、第三の居場所に求める条件を検討することができると思われる。